



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第7回例会(8月24日)
平成24年8月31日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10
川徳デパート内
例 会 場 同上 TEL(651)1111(代)
FAX(653)5622
例 会 日 毎週金曜日12時30分～

会 長 藤村 文昭
幹 事 佐藤 重昭
会 報 福田 荘介
クラブ直通電話 TEL(653)5682

奉仕を通じて平和を Peace Through Service..... RI会長 田中作次

ゲスト卓話



「三陸沿岸 観光と産業
復興への取り組み」

岩手県中核観光コーディネーター
草野 悟 氏

スピーカーク紹介

草野悟さんは昭和25年福島県いわき市のお生まれです。大手広告会社アサツーディーケーにおいて数々のお役職を歴任し、平成19年草野プランニングオフィスを立ち上げ、岩手県をはじめ各自治体等紹介しきれないほど数多くの企画、プロデュースを手がけるほか産業振興、地域振興のアドバイザーをされ、講演会、セミナー講師等幅広く活躍されております。(阿部広会員)

自力での復興

大変暑い、むしろ熱いと表現したほうがよい今年の残暑であります。被災地の各所で、遠方からのボランティアグループが、真っ黒になって復旧への作業に取り組んでいる姿を目にします。「一過性の支援云々、継続が大事」など言われておりますが、遠方からのこうした応援の皆さんが多数目立ちますが、地元の人たちの姿が少ないように感じます。

今回の話のテーマは、岩手三陸の沿岸にとって、自力収入への道はどんなものがあるだろうか、に絞ってみました。

多くの方々が提言していますように、「観光」と「地域産業」は私も重大なテーマと思っています。この「観光」と「地域産業」は、別物ではなく常に一体化して動いていくものです。瓦礫処理や、被災者、ご遺族の状況などメディア各社が日々伝える通り、全国からの大きな関心、注目を浴びている課題であります。一方、地域の方々にとって、次のステップはなんだろうかと考えますと、「自力収入」にあると考えます。多くの被災者の人たちと会話していると、「たくさん支援、応援をいただきとても感激し、感

謝している」と皆さん同じように答えます。でも、それは感謝であって、次の生き方の材料ではありません。「震災後、初めて作った商品が売れた」とある加工食品会社の方が言っていました。とても嬉しそうな笑顔です。ある浜の青年は、「明日、初の水揚げがあり興奮して寝られない」と顔を紅潮させていました。山田の仮設食堂で復活したうどん店店主は、「再び自分の作ったうどんて売上げとなった」と開店の時涙を浮かべていました。

被災者の人たちは、自分の力で収益を上げる行為に大きな生きがいを感じます。自力復興こそ最大の良薬なのです。そこが回転すれば、そこにいくばくでも仕事生まれ、愛する郷里で働く場も生まれます。

ただ、すぐに、すべて「自力」と行きません。そこに行政や民間の支援者の力が必要です。「自力収益」のために、背中を押す係、専門的な知識を伝える係、難しいサプライチェーンなどの特殊ノウハウを指導する係、連携してともに目指していく仲間、そうした「人」が何よりも大事です。

「交流人口」について

そのような背景で、直近のテーマとして必要なものは、「交流人口の活用」だと思います。震災後数多くの人が被災地に集結し、いまなお視察、ボランティア、工事と、人の動きが続いています。

正式な数字ではありませんが、私が各所からヒアリングして調べた数字ですが、「交流人口」の分析をしました。

第一に、震災直後から全国、世界各地、地元、のメディアが集結しました。記者やカメラマンなどのクルーです。芸能人やスポーツ選手などもそうです。そうした人たちの数は、年間20万人にのぼります。1年を経過し、10分の1に減少したとはいえ、まだ多くの報道陣や芸能人、ミュージシャンなどが来ています。

次に、ボランティアです。岩手県だけでも延べ30万人前後は駆けつけてくれました。最近の報道では「ボランティア不足」と言った、減少危機みたいなニュースも流れますが、肉体的労働環境が変化してきたことも一因です。それでも、全国にはまだまだ多くの応援者が控えています。現に、交流のある和歌山大学の学生さんたちは、これからも何年も続けます、と言っています。

研究者や学者、行政視察、専門的技術視察などの知識人も10万人規模だと思います。この分野は、岩手ジオパーク、ILC 研究者、推進者、気象、地震などの研究で、まだまだ続きます。数字にこそ出ませんが、地域から大感謝されている自衛隊、警察の方々の数も膨大です。2011年は推測20万人は下らないと思っています。

観光客も増えています。一般人の被災地観光のほか、三陸鉄道で、ある種のポジションを確立した「被災地フロントライン研修」などです。岩手DCの効果もありました。そうした観光客

数は、11年10万人程度から、2012年はさらに増え、今後も伸びていくと推測できます。

もっとも重要な交流人口の中心は、「工事関係者」です。国直轄の高規格道路、主要道路、港湾整備、は急ピッチ工事です。さらに県発注工事、市町村発注工事と絶えまなく工事が行われています。内陸から沿岸部への朝夕の渋滞、沿岸国道の渋滞と「震災工事バブル」という人もいます。それは今回のテーマとは別の論議です。触れませんが、これらの工事関係者の数は、年間延べ200万人になります。極めて大きな交流人口です。全国各地から集まった工事関係者の方々は、夜は飲食店で食事をし、休みには郷里へ岩手の海産物などを送ってくれます。当然宿泊施設は常に満杯です。実に大きな経済効果を生み出しています。

これらの「交流人口」は、年間300万人以上と推測できます。彼らは食べ、買い、泊り、移動し、岩手の魅力も体感します。自力収益のためには、こうした交流人口にしっかりとアピールできる体制を整えるべきだと思います。

岩手の魅力を伝える「観光」と「食」

その材料に「観光」と「食産業」があります。これらの交流人口へしっかりとアピールできるスキームを創り上げ、その先には平常時の取引環境ができるように整えていくことです。観る観光、団体受け入れの観光と言った、従来型の観光スキームは、その後の復旧状況を見ながら対処すればいいと思います。その前に、今後数年（5年以上）続く復旧工事、復興整備工事に伴う交流人口こそがある種のマーケットであるという考えです。工事関係者ばかり泊まって観光客が泊まれない、または来ないという批判もありますが、この交流人口によって、釜石や大船渡、陸前高田市の仮設飲食店は賑わっています。その先が大事です。「岩手の魅力を訴えられる食の提供とサービスの在り方」を研究すべ

きです。食べる場所がないから、なんでもいから腹に入れば、では次の創造に結びつきません。交流人口の買い求めるお土産一つとっても、「魅力」が不可欠です。

その支えとなるのが、漁業です。三陸沿岸は、漁業ばかりではなく、農畜産も立派で素晴らしい食材が揃っていますが、当面は漁業にスポットをあて、その魅力創造をすべきです。

三陸の生鮮、海産物の漁獲は、徐々に復活してきています。海流に乗り、あるいは放流、養殖と素晴らしい魚介類が戻ってきています。毎日、定置網が復活した浜の水揚げは賑わっています。

ところが、漁師の収入には決して結びついていません。むしろ超安値で取引されています。時折支援の企業からの買い付け美談的報道などもありますが、沿岸の産業を支えていた零細な加工業者の復活が無ければ、獲った魚も売り先がありません。その結果、二束三文、あるいは投げ売り、廃棄ということが現実に起こっています。夏、秋に大量に網に入るイナダや汐子、鯖などは、小さいものなど1尾1円未満、小さな鯖、イカは廃棄という状況です。

震災前までは、こうした新鮮で格安の食材を加工業者が買い取るため、ある程度浜値は安定していました。鮮魚として市場に出回るのは、全体の3、4割で、残りは加工だからです。

岩手の水産加工食品企業の大半は零細です。家も工場も流され、いまだに復活できないところが多数あります。大手は資金、流通ネットワーク、報道支援もあり震災前より販売額が驚異的に増えているところもありますが、大半は四苦八苦です。

三陸鉄道は、自身も復旧の真最中ですが、望月正彦社長の強力なリーダーシップもあり、地域貢献を社員の行動指針にしています。そのため、被災地フロントライン研修で集めた客に、沿岸のこうした商品を勧め、あるいは一緒に開

発し販売強化をお手伝いしています。それでも微々たるものです。いまこそ内陸部のリーダーたちが、こぞってこうした支援に向かうことが、岩手県の大きな財産へと成長すると確信しています。

観光は、従来型でなくても十分魅力を創れます。ここには世界に例を見ない大震災のケーススタディがあります。これから予測される地域で、シュミレーションをしてみるなどは到底無理なことです。現実に被災した太平洋沿岸にこそ、勉強のフィールドがあります。教育旅行も今後のカギとなります。子供たちにも、まだ訪れていない大人にも、しっかりと見ていただく場所、つまり観光要素としての価値が十二分に存在しています。

観光と食産業の魅力を合体し、岩手のホスピタリティを発揮できるものとして「民宿」があります。公共の宿も対象です。岩手の沿岸には、前述の通り、豊富な海、川の魚介類があり、急峻な地形を活用した農業、畜産業、酪農があります。その上、自然採取物（山菜、キノコ）も豊富で優良です。食の組み合わせは無尽蔵にあります。

岩手の民宿は、そのポテンシャルを秘めています。そこに県はしっかりと指導する人材を送り、具体的な成果を求めるべきだと思います。ただ民宿も多く被災しています。一概にロジック通りにはいかないことも当然ですが、残った民宿をしっかり育成し、見本を創っていくことで、浜にやりがいを提供できます。先人の教えから、ほとんど無傷だった大船渡の吉浜には小松荘、弁天荘はじめすべて民宿が残り、震災直後から支援団体、機関の基地として提供し、素晴らしい貢献をしていただきました。緊急支援の宿泊者から直接聞いた話ですが、格安の宿泊料のほか、当時は食糧調達もままならない中、浜の食材でしっかりと朝夕食を造ってもらい、大変感激した、と言っていました。まさに岩手の魅力

です。

最近は、震災当時派遣された記者の方々が、休暇を取りプライベートで時折再訪してくれます。当時の取材を懐かしがり、再び家族と美味しい三陸に会いに来た、という方もおりました。まさに「美味しい三陸」がキーワードなのです。一流知識人からの復興プログラムも沢山出てきています。それはそれでありがたいことですが、「自力復興」と、そのバックアップこそがいま必要なことと強く感じております。

三陸鉄道は、来年4月、待望の南リアス線の部分開通となります。再来年の4月には、すべての路線が復旧し、元通りになります。またいつもの三陸、ではなく震災により学んだこと、応援への感謝のため、新生三鉄として生まれ変わろうとしています。新しい三鉄として、そして地域と一体になって沿岸復興へ取り組む姿を見せてくれると信じています。

盛岡ロータリークラブ様のご発展、そして被災地への応援をご期待いたしております。

例 会 報 告

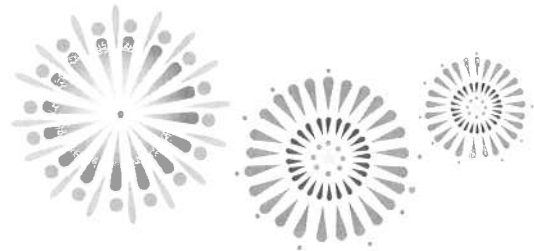
**第7回例会
平成24年8月24日(金)**

- 於 川徳 12時30分 開会点鐘
- ・司会 藤村文昭会長
- ・ソング 手に手つないで
- ・ゲスト 草野 悟様 (岩手県中核観光コーディネーター)。
- ・会長報告 藤村文昭会長

- ・功労者お知らせ ポールハリスフェロー・マルチプルフェロー千葉隆史会員
- ・幹事報告 佐藤重昭幹事
- ・終了後、臨時総会開催 (会友制度について (クラブ細則の改正))
- ・委員会報告 ロータリーの友 8月号25P「ロータリーアットワーク」欄に当クラブの東日本大震災復興祈念植樹の記事が掲載されております。ご一読ください。

【他クラブ例会変更のお知らせ】

- 盛岡東R.C.=9月10日(月)は盛岡城跡公園美化活動のため9日(日)朝7時に変更。太鼓橋付近集合。9月24日(月)18:30~さんさ踊り夜例会に変更。
- メークアップ
盛岡北R.C.=菊池・大見山君。盛岡西R.C.=平野・吉田(育)君。盛岡西北R.C.=岡村君。クラブ委員会=千葉・星・民部田君。



出席報告 □ 会員数 /62 名 □ 出席数 /40 名 □ 出席率 /75.47% □ 前々回修正出席率 /83.33%

プログラムの
お知らせ

- ・8月31日(金) 新入会員卓話 嘉本孝志会員
「地震対策補強技術」
- ・9月 7日(金) 新入会員卓話 山岸晃浩会員
- 14日(金) ゲスト卓話 漆原栄美子さん (民謡歌手)
- 21日(金) ゲスト卓話 前田千香子さん (焙茶工房しゃおしゃん主宰)

- 本号編集担当 / 菊池 尚
- 次号編集担当 / 駒木 進